



北見マラソン

「高校生の力は無限」

北見藤高生がボランティアで運営後押し

2023年を最後に中止となった北見ハーフマラソンに代わるイベントとして今月4日に初開催された『北見マラソン』（高橋雄太実行委員長）。市民の有志らで構成する実行委員会は「手作りの大会で地域を盛り上げよう」と企画・運営などを一手に担ったが、ここに大きな戦力が加わった。そう、北見藤高の全校生徒約400人によるボランティアの援軍だ。

北見マラソンを企画した
今井康暁さん(左)と高橋雄太さん

時の北見青年会議所メンバーで北見ハーフマラソン実行委員として大会運営に携わっていた高橋雄太さんと今井康暁さんの両名が「ハーフマラソン大会はこの街になくてはならない存在。その復活への足がかりとして、なんとか市民の力を結集させてマラソン大会を立ち上げできないだろうか」と連日熱い議論を交わし、新たな大会発足に向けて秘かに水面下で準備を始めた。もちろんハーフマラソン時代の運営ノウハウはあったものの、基本的にはゼロからのスタート。それでも「地域を元気にするイベントを」との思いを胸に前へと進んだ。

「救世主、突如降臨。」

今年5月、実に8年ぶりとなる『おんねぬ温泉むらさきつつじロードレース』がおよそ200人のランナーを集めて復活開催された。実はこのイベントの仕掛けは高橋さんと今井さんの2人。地元温泉湯温泉大江本家大江社長の賛同を得て、大会復活への道を切り開いたのだ。高橋さんは「やっぱりたくさんの方が集まるあの雰囲気は最高。何とか秋には北見でのマラソン大会を実現させたい」そう思いを強くした。だが、大会の運営にはもちろん多くのボランティアスタッフが必要。ハーフマラソン時代にもかなりの苦労を要した大きな課題だ。さて、これはどうしたものか。2人が頭を悩ませていた或る日のこと、頼れる救世主が突如目の前に現れた。そう、北見藤高の内藤聡教諭だ。

総探授業のカリキュラムに

かつて北見北斗高陸上部の顧問だった内藤教諭は、当時からハーフマラソンの運営に全面的な協力を申し出てくれた最高の理解者だ。内藤教諭にマラソン大会立ち上げの企画を相談したところ、反応は上々。後

「地域盛り上げるイベントを」

華やかに色づく北見の秋を演出してきた『北見ハーフマラソン』。残念ながら2023年の第15回大会を最後に中止となり、大会関係者や参加者たちは落胆の色を隠せなかった。「全国各地からランナーが集いオホーツクのグルメも堪能できる華やかな大会。せっかく北見の街に根付いたイベントだと思っていたのに」と皆肩を落とした。そんな中、当



日、同校の堀俊一校長にも掛け合ってもらい「ぜひ北見藤高で全面的に協力をさせてもらいたい」との朗報が寄せられた。具体的には、同校2年生の『総合的な探究学習』において

市民マラソン大会の企画運営に参画するカリキュラムを導入。6月からスタートした当初の授業には高橋さんと今井さんの両名が講師となって参加し、大会のマニュアルや企画運営のスケジュール等についてレクチャーを行った。その後の授業では生徒自身が様々なアイデアを出し合い、これまでのマラソン大会の常識ではおよそ考えもつかなかった『吹奏楽部による沿道での応援』『応援ダンスで華やかな雰囲気づくり』『ゼッケンにニックネームを記入』など、若き高校生ならではの斬新な発想が次々と飛び出し「高校生の発想力はスゴイ。我々の想像を超越する華やかな雰囲気の大大会が実現するのでは」と、今井さんらは大きな期待を寄せた。

「唯一無二のマラソン大会」



迎えた大会当日、北見藤高の全校生徒およそ400人がポランティアで集結した会場内は漲る活気に溢れた。普段のマラソン大会とはどこか違う、それでいて誰もがワクワクするような華やかな雰囲気会場中に広がったのだ。



大会は2・5⁺（小学生・親子）、5⁺、10⁺の3コースが設定され、北見市内外からおおよそ550人がエントリ。校内マラソン大会の代替にと北見工業高の生徒たちも多数参加し、沿

道に陣取った北見藤高生の華やかな応援と給水所での献身的な姿に背中を押され、爽やかな秋晴れ広がる北見の街をランナーたちは颯爽と駆け抜けた。

高橋さんは「弾けるような笑顔の高校生たちが大会に華を添えてくれた。どんなマラソン大会にも負けないほどの素晴らしいイベントになった」と感慨深げに生徒たちの奮闘する姿を見守った。手作りにして、他では決して見られない唯一無二のマラソン大会。まさに地域の人たちが互いに手を取り合い、協力して作り上げる渾身の作品だ。「初めての企画なので自分たちも手探りだったが、生徒たちが率先して意見を出し合い積極的に取り組んでくれた。高校生にとっても自主的に行動することの大切さを学ぶ良い機会になったのでは」と思いを寄せる。

このイベントは次年度以降も北見藤高と連携して行う意向のようだが、高校生たちの無限の発想力を散りばめたこの『北見マラソン』が、新たな北見の名物として定着する日もそう遠くはないだろう。

